

菊間の魅力を発信！ふれあいスタジオ

菊間の魅力を発信！ふれあいスタジオ

今治市のコミュニティ放送FMラヂオ...

恒例になった節分行事
菊間町には、厄除けで知られる寺院「遍照院」...

恒例になった節分行事

の場としても利用されています。



地域交流サロン「ふれあい喫茶」

多彩なコラボレーションと秘策がいっぱいの「駅市」

昨年11月、菊間駅前広場、周辺の商店街が...

この催しは、「駅市」と題し、不定期の日曜日に、菊間駅前の広場スペースを活用して...



ふれあいスタジオでの収録



歴史の価値の高い場所。今治・松山に通学する高校生たちにとっては、現在も大切な場所です。無人化になることにより、町全体の活気がなくなり、駅周辺の環境や治安の悪化を心配する話が多く聞かれました。そのようなか、菊間駅の活用を願う住民有志がつい、「ふれあいステーション」を設立しました。私たちが...

わたしたちの「菊間駅」を守りたい

JR菊間駅は、1925年(大正14年)に松山駅に先駆け開業し、90年近くの歴史を刻んでいます。かつては、多くの職員が駐在し、鉄道駅を中心に地域・産業が発展したことは言うまでもありません。戦後、モータリゼーションにより鉄道の利用頻度が下がり、近年では、高速道路料金施策など厳しい経営環境が続くJR四国は、駅業務体制の見直しを迫られていました。内容は、平成22年10月より四国257駅の206駅を無人化に踏み切るといったものでした。そんな中、菊間駅も完全無人化となる話が飛び込みました。その話をしてくれたのは、長年、菊間駅の駅業務にたずさわってきた井手さんと田村さん。菊間駅に一番愛着を感じていたお二人です。地域に住む私たちにとって、駅は人の往来・交流による賑わいが絶えなかつた多くの思い出の場所であり、歴史の価値の高い場所。今治・松山に通学する高校生たちにとっては、現在も大切な場所です。無人化になることにより、町全体の活気がなくなり、駅周辺の環境や治安の悪化を心配する話が多く聞かれました。そのようなか、菊間駅の活用を願う住民有志がつい、「ふれあいステーション」を設立しました。私たちが...

きれいな駅が人の交わりをつくる

「ふれあいステーションきくま」の基本は、駅をきれいに守っていくことです。駅を利用されるみなさんのご協力はもちろん、駅を借りた当初から女性ボランティアのみならず、努力もあって、駅舎内だけでなく、トイレ、ホームの清掃と景観維持につながっています。

特集① 駅舎の空きスペースの活用

無人駅から地域再生につながるまちづくりプロジェクト



ふれあいステーションきくま ボランティア駅長 羽藤 謙司 (今治市)

また、ボランティアのみなさんによる駅周辺の塗装や大工さん有志による県産材を活用したリフォームで、より一層美しい駅になりました。ふれあいステーションきくまの活動の柱は、駅舎を住民の交流拠点として、多くの方々にご利用いただくことです。毎週水曜日には、地域のボランティアが中心に、地域交流サロンを開催しています。サロンは、誰でも気軽に自由に参加できる地域の憩いの場です。松山市北条地区にある「おもてなしサロン明星」の運営方法などを視察するなど、地元福祉協議会の協力も得ながら、進めてきました。サロン開設当初から、婦人会や商工会女性部、手話サークル、医療生協などが交代でサロンを運営。おしゃべりをしたり、手芸をしたり、駅周辺の高齢者の方だけでなく、同じ菊間町にある亀岡駅からも電車で1駅というところもあり、亀岡地区からも、多くの方に来ていただいています。その他、駅舎は囲碁や女子会、同窓会などの地域住民の方々いろいろな会合としても利用していただいています。また、児童館と協働した取り組みとして、子どもたちによるキッズカフェや地域文化資産を活かした子どもと大人が楽しみながら交流するイベントなども企画、菊間中学校の総合的な学習



節分

地域の誇りと新たな可能性を！

「ま」のブログで、お知らせしますので、ぜひ遊びに来てください。きっとあなたのほしいものが見つかります！

ふれあいステーションきくま開設を考えた会を発足し、3年が経過しようとしています。駅を借受けることができたなら、同時に夢を抱く中、予想以上のスピードで、形を築いてきました。活動も軌道に乗ってくる中、えひめ地域政策研究センターのアシスト事業(助成金)を活用し、初の機関紙「きくま 駅から新聞」を発行。ふれあいステーションきくま開設までの軌跡と、開設してからの取り組みを掲載し、これまで運営にご支援、ご協力をいただいた方々に対する、活動の報告にもなりました。

わたしたち菊間町の住人にとって菊間駅はかけがえない場所。世代や領域を越えた人と地域のつながりを生み、新たな出会いと育ちを地域にもたらしています。

ひとつひとつの歩みが地域の誇りであり、今後も若い人たちに受け継がれ、新しい地域を創造していく可能性を秘めています。

NHK連続テレビ小説「あまちゃん」の舞台、北三陸駅のようにアイデア満載の企画を立て、ふれあいステーションに関わる人たちの「活動の楽しさ」や「生きる喜び」につながるよう、これからもチャレンジしていきます。

**特集** 地域の遊休施設を活用した  
まちづくり

3月3日～4月3日には商店街の店舗や住宅にお雛様を飾る「郡中ひなざり」の開催。11月第2土曜日には、いっぷく亭の普段の活動や教室の作品を発表する「郡中いっぷく亭まつり」を開催しています。

また季節の行事やお祭りにも積極的に協賛、参加しています。

3月第4日曜日に開催される「五色姫復活祭」ではいっぷく亭趣味の教室の手づくり作品の販売。6月第1・2・3土曜日に開催される「ふれあい土曜夜市」では、いっぷ



習字教室

は休館しています。

運営はボランティアの皆さんによる「いっぷく亭運営委員会」が行い、訪れただけの方へは湯茶のお接待と話し相手をする心をかけて

く亭で様々な協賛イベントを開催しています。

いっぷく亭の様子は、伊予市商業協同組合ホームページ「よいとこ郡中」にも掲載していますのでご覧になってください。

**郡中いっぷく亭の活動とおして**

私達運営委員はいっぷく亭の活動を通して、地元のお子さんや教室に来る人達と親しくなり輪が広がりました。また講師でお招きした若松進一さんや「いっぷく亭の歌」を作曲してくださった富井建樹さん達とも親しくなり、お二人は色々な分野で町おこしをしている方たちなので勉強させて頂いています。「郡中ひなざり」では、テレビで紹介されてから遠くの方が見学に来るようになりまし。今年里帰りをした千葉原の方が、「懐かしい御殿様を見てうれしかった」とメモを残してくれました。

こういった言葉は、飾る者にとって励みになります。昨年の3月3日にはご年配の方を中心に雛めぐりツアーを、今年4月3日には子供たちを招待してひな祭会をしました。20名位かなと思っていました。子供やお母さん達を含めると60名にもなりうれしい悲鳴を上げました。来年は時間をずらすなどしてもっと工夫をしようと思ひなで反省しました。「郡中いっぷく亭まつり」では、お年寄りさんを招待して、お茶の接待やバザー、手作り作品の見学など案内して回り「誘ってもらわなかったら、街に出る事もないし、楽しかった」と喜んで貰っていま



第6回いっぷく亭まつり

**郡中いっぷく亭 開設の経緯**

2005年度(平成17年度)、伊予市商業協同組合の組合員を対象にした勉強会で「お年寄りに優しいまちづくり・店づくりを行い中心市街地の活性化を進めよう」と言う意見がまとまりました。その内容は中心市街地の各所に「ちよっとひと休みベンチ」の増設、お年寄りの方をはじめ誰もが気軽に利用できる交流施設づくり、楽しく買い物ができる場づくりと縁日などの検討です。これらを目指し、2006年度(平成18年度)に伊予市から、お年寄りに優しいまちづくりモデル事業の補助金交付を受けてこの事業が開始されました。利用される方の利便性も考慮し、商店街の中心部に位置する空き店舗を活用し交流施設「郡中いっぷく亭」がオープンしました。ボランティアによる常設型のサロンとしては伊予市内では唯一、県内においても数少ない交流施設として地域の人たちに親しまれています。

**開設に向かって**

しかし、ここに至るまでには色々な問題がありました。

まず、お手伝いしてくれる人の確保が必要となりました。老人会など各種団体に協力をお願いしましたが、皆さん自分たちの事で手が一杯で、手助けする余裕がないようでした。はつきりと、「そんな交流施設を作っても誰も来ませんよ」と言われまし

**特集② 空き店舗の活用**

ちよっと  
およりんか  
郡中いっぷく亭

郡中いっぷく亭 運営委員 水口 純子 (伊予市)

た。また「ボランティアのお手伝いは無理かも」との声もあり難航しました。

そこで運営委員さん達は、知り合いに声を掛けて協力して下さる方々に集まっていたいただきました。また新聞



くろみ絵教室



いっぷく亭ひなまつり (いっぷく亭室内)

**現状**

いっぷく亭の開館日時は月曜日から金曜日の10時から15時までとし、運営委員さんは午前と午後に分けて、2時間半の当番制にしています。土曜日・日曜日・祝日、年末・年始とお盆の期間、春と秋の地方祭

を見たと言ってお手伝いしてくれる方や、フラワーアレンジメントを教えてください方も現れて、当初40名で開設しました。じつと待っているだけでは、人に来てもらえないからと、「趣味の教室」を始めようとか、色々試行錯誤しながら、現在の教室体制になりました。現在では生徒さんが増えていっぷく亭が手狭になるほどです。

色々頑張ってきたいっぷく亭も6年が経ち運営委員さんの中で体を壊す人が出るなどして、現在は20名で運営しています。少なくとも分しわ寄せが来て、ひな人形を飾る時にみんなの負担が多くなるなど新たな問題が起きていますが、お年寄りに優しいまちづくり、いっぷく亭の運営の事など自分がしなくても、誰かがするだろうと人任せでなく、いっぷく亭を立ち上げたときの様に、手を取り、知恵を出し合っこの素晴らしいいっぷく亭を続けて行きたいものです。

農林業を題材とした  
交流イベントの開催

総務省の地域力創造アドバイザーである  
斉藤俊幸氏からご提案を受けてピザ釜を製



ピザづくり体験

田之筋地区にはたくさんの良い素材があり  
ます。自然も農地もたっぷりあり、若者  
は少ないですが、団塊の世代など人材は豊  
富です。またインターチェンジが近くに  
あるなど、交通の利便も良い場所です。そ  
ういった良い素材を活かし、自分たち住民  
が人々の手を借り、人に手を貸し、また地  
域外の人々とも共生して「かがやく」むら  
のすじ」を造っていきたいと思います。

店舗内の様子



惣菜・弁当の宅配事業

「たまには食事を準備する手間から離れ  
てみたい」という希望が顧客の方から出た  
ことをきっかけに、毎週月曜日には地元食  
材を生かした惣菜、手作り弁当を作る取  
組みを始めました。時間にゆとりのある女  
性のグループが、普通の家庭の味をお届け  
することを大切に考えて調理しています。  
柚子をくり抜いて容器にするなど、季節感  
を味わえるメニューになるよう毎回工夫を  
重ねています。惣菜とお弁当ですが、田之  
筋地区内に関しては注文による宅配を行う  
ほか、喜ちゃんない屋でも販売しています。

今後の方針

作し、ピザづくりを通じた交流イベントも  
行っています。ピザはみんなが同時に作り  
食べ、楽しめるので、大人数での交流を行  
うのに適しています。喜ちゃんない屋は小  
学校が近くにあるため、田之筋緑の少年団  
に所属している小学生を主な対象として始  
めましたが、お年寄りにもピザのファンに  
なる人が出てきました。今後は公民館の事  
業である文化祭や運動会とも協力してピザ  
づくりを行いたいと考えています。

今後は店舗内に簡単な飲食部門を立ち上  
げて、人が集まる場を作ることを検討して



弁当づくり

田之筋地区の概要

田之筋地区は西予市宇和町にあり、松山  
自動車道の鳥坂トンネルを抜け、西予宇和  
インターチェンジ付近までの間にある、山  
間の細長い地域です。世帯数は630戸で  
人口が1,500人となっています。地区  
の課題としては、農業者の平均年齢が60、  
8歳と高齢化が進んでいること、地域の公  
共交通機関が市営の福祉バスしかないため  
に、買い物に不便を感じている高齢者がお  
られることが挙げられます。



「喜ちゃんない屋」店舗全景

設立の過程

田之筋地区は中心部に小学校、保育園、  
公民館、郵便局と「喜ちゃんない屋」の前  
身であるJAひがしうわ田之筋店など主要  
な施設が集中していました。地域の活力を  
維持するためにも全施設が活動を続けるこ  
とは大切であり、特に車などの移動手段が  
持っていないお年寄りのためにも買い物  
できる施設が必要でした。しかしJA田之  
筋店の先行きが不透明であり、撤退してし  
まうのではないかとこの懸念が地域の住民  
の中にはありました。実際、住民の皆さん  
にアンケートで意向を伺ってみると、回答

特集④ 空き店舗の活用

喜ちゃんない屋で  
村興し!



企業組合 喜楽たのすじ 理事長 大塚 俊秋 (西予市)

買い物バスの運行

喜ちゃんない屋は地区の中心部という利  
用しやすい場所にあります。最も遠い集  
落だと3キロメートルほど離れています。  
また地区を通っ  
ている公共交通  
機関は前述のと  
おり市の福祉バ  
スのみであるた  
め、買い物弱者  
の立場に置かれ  
ている住民はお  
年寄りを中心に  
多く存在してい  
ました。その対



店舗内の様子

**特集** 地域の遊休施設を活用したまちづくり



スタジオ内

平成21年春に地元音楽愛好者による「中津さくらまつり音楽会」を開催して、木造の校舎や音楽室がもつ雰囲気の中、音楽を地域みんなで楽しめたことが、「大人の音楽学校」誕生のきっかけとなりました。その頃松山市でスタジオOWL(オウル)を経営する高橋孝雄さんを新聞で知り、公民館と一緒に、なつて「中津ミュージックキャンプ」をやるうというこことになりました。

また、学校整備では、シャワーの設置、トイレの洋式化、郷土出身の彫刻家の展示室や手作りで石窯もできました。放送室は本格的にデジタル録音できる施設設備の整備を行い「中津ソニックスタジオ」と命名しました。また、学校の音楽室はステージやピアノ、音響設備などが充実してきています。施設は、ミュージックキャンプのほか、プロのミュージシャンを招いての音楽会、秋の芋たき音楽会、冬のクリスマス音楽会など四季を通して活用される一方で、メンバーは学校内だけでなく、町・県内外に出かけて行く出前演奏活動も行っています。これらにより地域住民の活動はより活発となり、つながりは深まって一昨年から東日本大震災復興支援の「結い音楽祭」も開催しています。

**中津ミュージックキャンプと結い音楽祭**

- 放送室を録音スタジオに
- 多目的ホールと音楽室を使ってライブステージ
- 大きな公演は体育館また近くの「さんさんドーム」で
- 隣接の公民館施設も活用
- 夏場はリゾートプール

地域資源や地域活動の見直しが行われ、公民館には新たに「大人の音楽学校」「田んぼの学校」「食の文化」活動が位置づけられ、活動を伝えるホームページも開設して、それぞれがつながりながら活動が行われています。

**課題と今後の展望**

大人の音楽学校の課題としては、活用すればするほど施設の受付案内・管理・運営をどうしていくかという課題が出てきており、公民館の枠を越えようとしています。反対に、もっとHPなどを使って情報発信し、音楽に関心のある方との交流を深め、更なる活用を図っていく必要があります。限界集落といわれる地域で、廃校を生かした「大人の音楽学校」活動は、産みの苦しみを経て、いま次のステージに進もうとしています。



「結い音楽祭2012」には1300人が来場した(やなだにさんさんドーム)

**久万高原町の中津地区**



旧中津小学校、バックにシンボルの明神山が望める

旧柳谷村の中津地区は、松山から国道33号を行くと高知との県境にあり、7つの自治会で編成される世帯数約130戸・人口約260人の地区です。シンボルとなる中津明神山(1541m)の比較的傾斜が緩やかな麓に、古くから人々が住んだことから、江戸時代までは久しく人が住む「久主村」と呼ばれていました。南に向かつて開けた棚田は美しく、その中心に久万高原町公民館中津分館施設となつた旧中津小学校があります。

**特集⑤ 廃校舎の活用**

**廃校になった校舎に歌声がひびく**

「大人の音楽学校」で地域が元気!



久万高原町公民館 中津分館 主事 稲田 稔久 (久万高原町)

高知との交流もあるせいの人々は陽気で、何かにつけて結束力の強い気質があり、公民館を中心に活動も活発で、柳谷壮年会と一緒になつた目標5万本の山桜植樹「桜の里づくり」事業を実施しています。また樹齢230年の「西村大師堂のしだれ桜」を中心に開催される「中津さくらまつり」には、期間中延べ約6000人の方が訪れます。

**旧中津小学校活用の模索**

しかし過疎化・高齢化が進み児童・園児数が予想よりも急激に減少して、平成13年3月ついに閉校。学校創設から116年の歴史に幕を閉じました。

**大人の音楽学校として活用**

閉校以来、地区の中心にある学校施設の活用方法はないかと、高齢者福祉施設への転換などが模索されましたが、施設の改修や運営などの問題もあり、結局は年数回の地域行事での使用となっていました。学校施設が比較的新しい木造2階建てで、体育館・プールも敷地内にあり、住民の文化活動も盛んで色んなことに協力的など、これらの特色を活かして改修経費や運営費をかけないで、しかも地域の活性化につながるものはないか?

- 木造校舎がもつ音響効果
- 世代は「音楽」でつながり、キーワードは「音楽」という考えの下、
- 地域のロケーションや自然・歴史・文化を活かす。



中津さくらまつりでのライブ 中津ミュージックキャンプ 音楽室で開催された亀工房「ハンマーダルマー」のライブ



屋外休憩所

ちろんのこと、長田自治会館となった後もこの場所は長田地域の中心的施設であり、地域の活動及び地域のコミュニティの拠点となっていました。また木造の建物であるために農村景観にもマッチして長田の農村風景そのものとなっており、長田を訪れる方からも「美しい」「懐かしい」と言われます。そして、長田の自治会役員が施設の新しい活用法について内子東自治センターに相談したのがきっかけとなり、以上のような特徴を活かした「田舎体験宿泊施設」として整備することとなりました。

具体的には農林水産省の農山村活性化プロジェクト支援交付金から廃校・廃屋等改修交流施設整備事業を受けて校舎整備をおこないました。1、2年教室・3、4年教室を宿泊施設、図書室を食堂とし、理科室は調理室に改修しました。調理室は2部屋に区切り、宿泊された方が使用する自炊用と、まめなぎ会が宿泊された方に食事を提供する際に使用する食事提供用とに分けています。図書室は浴室、脱衣室、屋外トイレとするなどしました。

ソフト面の整備としては、宿泊される方への料理提供について、食事の力、長田の力で着々と校庭に形作られていきました。実際に囲炉裏などが出来上がると、やはり屋根があると、いつきに屋外休憩所も出来上がりました。



お山の学校「ながた」

メニユーの検討会、味付けの勉強会を女性グループが中心となつて行いました。会員個々がどのような受入態勢ができるか調査をしてそれぞれの調和を図りました。



こんにやくづくり

まめなぎ会の発足

私たち、まめなぎ会は長田地区の有志で結成した会です。当初は長田を考える会として発足しましたが、学校周辺にある山から名前をとって、まめなぎ会と改めました。閉校後に自治会館として使用されていた長田小学校を改装して作られた、田舎体験宿泊施設お山の学校「ながた」の管理運営を行っています。

自治会の活動  
長田もここから動き出す

高度経済成長のひずみはこのへき地にも容赦なく押し寄せ、日増しに多くなる出稼ぎの実態をくい止めることができず、長田小学校も一時は百余名いた児童数も10名となり、平成15年度にやむなく歴史の幕を下ろすことになりました。そしてその翌年である平成16年度からは長田自治会館として使用されることになりました。

学校がなくなり、長田の拠点がなくなるのは非常に辛いものがあります。このままでは長田もさみしくなる一方だと有志が立ち上がり自治会に提案し、自分たちでできることから始めよう、そして自分たちに何が必要なのかを考えました。そうすると「自由に集まって自由に話し合う場所がほしい」、「昔からある囲炉裏がいいのでは、それと石釜」、「石釜があれば新しいメニュー開発ができるのではないか」、「ならば釜戸もいるのでは」と夢はふくらみ、有志

特集⑥ 廃校舎の活用

学校から自治会へそしてまめなぎ会



長田まめなぎ会 会長 太田 利栄 (内子町)

この屋外休憩所は例えば自治会による「長田食の文化祭」の会場などとして活用されています。初回の「長田食の文化祭」は平成18年度に、各所からの援助をいただき、大成功に終わりました。それから現在まで途切れることなく引き継いでいます。こうして何かと利用している屋外休憩所も手狭となり増築を計画し平成23年度に地域づくり事業で、3倍の広さに増築できました。また長田小学校の時から、松山市の味噌小



石窯の作成

学校との交流を行っており、小学校閉校後も自治会が受け継ぎ、人数に限りはありません。その時のイベントとして、ドラム缶風呂をわかつて喜んでもらったことがありました。それを受けて五右衛門風呂をつくらうと提案があり、平成21年度の地域づくり補助事業で直径150cmの巨大五右衛門風呂を据え付けた屋根付き五右衛門風呂を建築しました。

お山の学校「ながた」の整備まで

以上のように屋外の施設はできましたが、やはり学校を何とかしたいという思いが強く、自治会で先進地に足を運び協議を重ねました。小学校の校舎として使用していた時はも

お山の学校「ながた」の今後

平成24年7月2日にお山の学校「ながた」をオープンして以後、多くの人に支援、宿泊、体験に来ていただいています。

今後の課題としては、冬の間の来客をどうするか、地元の人に利用してもらうためにはどうすればよいかが挙げられます。また農村体験の充実、修学旅行生の受け入れなどの計画を練ることも必要です。

お山の学校「ながた」には、温泉も、海も、川もありません。しかし、幸いにもホールがあり、教室があり、町内初のプールがあります。これらの利点を生かして小中学生の部活動、大学生による勉強会などに使ってもらいたいと考えています。

また山を歩きながら、昔からの由来について説明をし、食材を探しながら帰り、一緒に料理するなどの体験メニューを増やしていきたいと思っています。

他には1人暮らしの老人が多くなつてきているので、配食サービスなども考えています。

宿泊客や団体等の予約問い合わせに追われながらも、地域や住民が日々元気に変わって行くのを感じられた。また地域にコンビニや居酒屋が出来た事により生活の利便性も高まり住民同士の交流も活発になってきた。

さらに、イベントなどの企画等積極的な活動をはじめ、地区外からの交流人口の拡大に繋がり、ホテルまつりでは1000人を超える集客となった。

居酒屋は住民の単なる交流の場であったが、宿泊客には最高のおもてなしの場と化



高齢者仕事場



ホテルまつり



結婚披露宴

様が押し寄せて来る想定外の出来事となり驚いた！

接客やレジ対応等のデモンストラーションを行う間もなくパニックになった。やがて旅行雑誌にも紹介され宿泊客の予約が殺到してくる。こんな山の中、何も無い所に何で来るのか、不思議に思いながらも、嬉しい悲鳴を上げながら受け入れを続けた。

「宿泊客なんかあるわけない」という思い込みが一転した。廃業になったホテルから無料配布一式(70組)が調達できた事は何よりの助けとなった。

また全国津々浦々で廃校舎の再利用を模索されている市町村や様々な地域づくりフォーラム等で「森の巣箱」の事例発表を行い、多くの繋がりがや人との輪を大切に取組んで来た。廃校舎がこの様に利用されていく様子が様々な形で全国に発信され、視察研修に観光にと、小さな過疎の集落が今では、ちょっとした観光スポットとして注目をあびているのだ！

交流から福祉へ

しかし、集落にも様々な変化が起きており、これからの地域の将来と人々の暮らしや生活に、どのように向き合っていくべきなのか、10年後も住民が幸せに暮らせる仕組みづくりを考え始める事になった。

その一環で高齢者の生きがいづくりにより作業所を開設し、毎日の仕事という日課により高齢者達が共同作業場に出勤し自分の成



居酒屋は住民と宿泊客との交流の場となっている

森の巣箱 夜景



床鍋集落について

床鍋集落は、高知県中西部に位置する津野町の山間にある、人口97名の小さな集落だ。

ゴミの収集車が来ず、救急車や消防車が来るにも他の市町村を経由して数10分かかり、中心部と比べて行政サービスにも大きな格差のある地区であった。

小・中学校も廃校(昭和58年)、一軒だけあった商店もなくなり廃校から20数年間どうする事もなく明け暮れ、廃校舎の老朽化は過疎に追い打ちを駆ける光景を映し、ここに住んでる事の意味や誇りさえも失われようとしていた。

お店もなく日常生活にも不便をきたし地域のコミュニティも失われ、活気は、なくなっていく。

そうした現状に危機感を持った若者達が中心となり、集落の将来を考えるために会合が行われるようになった。会合の中では「買い物をする場所が欲しい」というニーズや廃校となった小・中学校に対する愛着などが再確認され、廃校を活用して地域を活性化させようという機運が高まった。そして平成12年に、県の集落再生パイロット事

特集⑦ 廃校舎の活用

集落福祉の新たな地域づくりに挑戦！



森の巣箱 施設長 大崎 登 (高知県津野町)

業により廃校舎再利用計画を打ち出し新たなプランの策定に取り組んだ。

閉ざされた暮らしの中で少しずつ希望の光が見え始める。創造や考えがまとまらず、消極的になる事もあったが、そこは行政との二人三脚で様々な形成を作りながら、夢を語り自由な発想で楽しい会合を重ねながら乗り越えてきた。

平行して、村と地域を結ぶ夢のまた夢のトンネル(1080m)が開通し、陸の孤島からも解消され、大きな転機を迎えた。

そして廃校舎は住民のニーズであった食料品や日用雑貨のお店、住民の交流の場、居酒屋やお風呂(温泉)などを取り入れ、形も

コンパクトなたたずまいとなつてリニューアルされた、農村交流施設「森の巣箱」に生まれ変わった。この時点では廃校舎が、これからの観光スポットになる事を、誰も予期することは無かった。

運営に関しては集落独自の運営を取り入れ、行政は関与しない事が条件で、集落が指定管理者となった。私達が自由に管理運営をして行くのだ！住民の利便性向上の施設誕生は大きな喜びにつつまれた。

運営の役割分担は、住民全員が参画する体制を作り、集落の協働運営は、相互扶助で成り立つものであり、お店(コンビニ)の運営には特に慎重に取組み、経営安定確保のため、各世帯との毎月の利用高の協定を結んだ。運営資金は各戸の出資を願ひ、400万で運用を始め、職員1名・パート1名の雇用を行い住民は全員「森の巣箱」のオーナーとして運営委員会組織を結成した。

集落に「ぎわい」がよみがえった！

「森の巣箱」のオープン(平成15年4月)は明るい話題としてマスメディアの取材・報道によりオープン初日から地区外のお客が押し寄せて来るようになった。

また、独居生活者の不安解消や災害時の助け合いなど、住民みんなが支え合い、見守る仕組みづくりを構築し、全戸へのお守りカードの配布と隣近所の関係をさらに親密な関係に取り戻して行く、取り組みを始めた。

この高齢化社会の中で、住み慣れた地域でいつまでも安心・安全に暮らせる命の絆と地域独自の集落福祉の充実を図りながら高齢者やみんなが幸せを実感できる地域社会の創出と、新たな地域づくり集落福祉の拠点を目指して、「森の巣箱」の第二章は、今少しづつ動き始めた。



森の巣箱コンビニ